

自閉症児の認知発達とふり遊びについて

「心の理論メカニズム」と象徴機能との関連性

立田幸代子*

本稿では、はじめに自閉症の研究について概観し、現在の研究動向を示した。その中で1980年以降、自閉症の認知発達に関する研究を推し進めた「心の理論メカニズム (Theory of Mind Mechanism: ToMM)」に関する理論仮説を取り上げている。この仮説から示されている自閉症の困難性が「共同注意の仕組み (Shared Attention Mechanism: SAM)」の形成のしにくさにあること、またSAMの形成のしにくさからToMMに機能不全が生じやすいことに焦点をあてて検討した。また、その背景にある問題を明らかにするために、象徴機能の発生とふり遊びの発達と関連させて検討した。SAMの発生期やSAMからToMMへの移行期は、ちょうど象徴機能の発生とふり遊びの発達が進む時期と重なっており、それらの関連性をジャン・ピアジェの子どもの観察事例を通して明らかにした。ここでは、SAMの形成のしにくさが象徴機能の発生 (ふり遊びの発生) を遅らせているのではないかと、さらには象徴機能の乏しさ (ふり遊びの展開のしにくさ) がToMMの形成を困難にさせているのではないかということを指摘した。そして、ふり遊びの内容を検討する中で、ふり遊びの発達段階に応じて療育プログラムを用意していくことが、自閉症の中核障害の改善をはかる糸口になるのではないかということ述べた。

キーワード：自閉症児，心の理論，象徴機能，SAM，ToMM，ふり遊び，療育

目次

はじめに

1. 自閉症研究の動向
2. 自閉症と「心の理論」の問題について
3. 「心の理論メカニズム」の発達とふり遊びの関連性
4. 療育の可能性について

はじめに

自閉症研究は1943年にレオ・カナーが報告して以来、60年近くの歴史がある。その中で自閉症の中核障害 (対人関係の障害，コミュニケ

ーションの障害，ふり遊びを含む想像的活動の障害) が明らかにされてきた。現在は、この中核障害を説明する理論として「心の理論メカニズム (Theory of Mind Mechanism: ToMM)」の獲得困難の仮説があげられている。

ToMMの獲得 (構築) は、通常9月ごろ (SAM発生) から4歳ごろ (ToMMの獲得) にかけて進み、7、8歳ごろに完成されると考えられている。ちょうど、この時期に対応する遊びの特徴として、ピアジェが指摘する機能的遊び (1歳半ごろまで)、象徴的遊び (1歳半から7、8歳ごろ) が見られる。特に象徴的遊

* 立命館大学大学院社会学研究科博士後期課程

びは4歳ごろを境にして、一人遊びから他者とイメージを共有するごっこ遊びへの発展が見られる。この象徴的遊びの発達過程で、自閉症の療育指導に関わって、近年ふり遊びの役割に注目が向けられている。

本稿では、自閉症児の乳幼児期の認知発達とふり遊び（象徴的遊び）との関連性について、「心の理論メカニズム：ToMM」の獲得に着目して、その特徴と療育の可能性について述べる。

1. 自閉症研究の動向

(1) 自閉症の古典的研究

自閉症研究の先駆者は、児童精神科医のカナーである。カナーは1943年に「情緒的接触の自閉的障害」の論文の中で自閉的障害をもつ11例についての詳細な症例報告を行った（Kanner, L., 1943）。カナーは、それらの特徴を「症候群」としてまとめ、次の特徴を記述している。

第1に、統合失調症¹⁾とは異なり、発症年齢が2年先行しているということ。第2に、特有な精神症状（周囲からの極度の孤立、遅延性反響言語²⁾や人称代名詞の逆転³⁾のような奇妙な言語症状、同一性保持の強迫的な欲求、ある特有の物事に対する器用さ、知性のある顔立ち）を示すこと。第3に、すべての両親は高い知性を持っており、冷淡で形式的な傾向がある。第4に、優れた機械的記憶力⁴⁾のような示すことが記されている（Kanner, L., 1943; 邦訳 53-55頁参照）。さらに、カナーは1946年の論文「早期幼児自閉症における不適切な比喩」の中で自閉症の特徴を記述し、出生以後、極端な引っ込みと人々と普通の関係を持たぬことがわかった子どもたちの状態を「早期幼児自閉症（early infantile autism）」と命名した（Kanner, L.,

1946; 邦訳 56頁参照）。これが今日、使用されている「自閉症（autism）」の由来である。

カナーと同時期に登場したのがハンス・アスペルガーである。アスペルガーは1944年にカナーに酷似する症例を「自閉的精神病質（autistische psychopathie）」で報告した（Asperger, H., 1944）。アスペルガーは、ウィーン大学のクリニックに通う「自閉的精神病質」を持つ子どもたちの典型的な4人の症例を報告した。アスペルガーはその症例に共通する特質を次のようにまとめている。第1に、生後2年目に入ると自閉的な特徴を示し、全生涯にわたってその特質を残す。第2に、幼少期より未分化な顔ではなく、彫りの深い顔立ちをしており、視線の回避も早期から見られる。第3に、表現的身ぶりやジェスチャーの乏しさが見られる。第4に、言語表現では物まねをしているような不自然さがあり、周囲の笑いを誘う。第5に、完全に自分たちの衝動に従って活動しており、周囲の要求には目もくれない。第6に、オリジナルな思考を生み出す能力があるが、大人から知識を吸収することには困難を持つ。第7に、集団生活（家族・学校など）の困難性が見られる。特に日常的な基本習慣などを身につけにくい。また同一性保持の傾向が強いため孤立する傾向がある。第8に、感情とパーソナリティの不調和が見られる。例えば、感覚異常（食べ物の好き嫌いや感触・音に対する過敏性など）やものを集めることへの執着、またユーモア感覚の欠如などがみられるなどである。総じて、この自閉的精神病質の特徴が2才頃から出現し、知的・性格的性能は発展するが生涯にわたりその特質は不変であることから、統合失調症とは区別して捉える必要がある（Asperger, H., 1944; 邦訳 137-178頁参照）。

いずれにしる、カナーとアスペルガーの提起した自閉症の概念は、その後各国において大きな影響を与えた。また、彼らの自閉症の特徴は類似している点もあるが、両者の症例特徴の違いも指摘されている。例えば、アスペルガーの症例は、カナーの症例に比べて知能の高い症例(多くの語彙と相応の文法能力などを身につけている症例)があげられている(Frith, U., 1991; 邦訳186頁参照)。

1940年の後半から1950年代にかけて、議論になったのは自閉症が統合失調症の一部なのか、あるいは別のものかという問題である。ヨーロッパの大多数はこの時代、幼児自閉症を単一の疾患として捉え、母親側からの情緒的要因によって発達異常が生じるという見方をしていた(Kanner, L., 1965; 邦訳138頁参照)。

(2) 1960年後半以降の言語・認知障害説

1960年後半に自閉症研究は大きな転機を迎えた。その転機は1968年にマイケル・ラターが言語・認知障害説を提唱したことによってもたらされた(Rutter, M., 1968)。ラターは今までの母子関係の情緒的要因説を否定し、自閉症を器質的な障害であると考えた。また、ラターは自閉症と言語障害との関連性について、それまでの研究成果をふまえて次のように述べている。まず、認知的欠陥は、自閉症候群の本質的な障害要素であること。また、言語の異常性は認知の欠陥から生じる中核的特徴を持つことなどである(Rutter, M. and Shopler, E., 1978; 邦訳121頁参照)。

その他、1960年後半は神経生理学的な見地から、自閉症の脳の器質的な障害に迫ったエドワード・オルニッツらの研究が報告された。オルニッツは、脳の前庭神経核系の機能不全に注

目した研究を行い、その中で自閉症の顕著な特徴が感覚のインプットの不完全な調節から生じている可能性があることを指摘した(Rutter, M. and Shopler, E., 1978; 邦訳157頁参照)。

1970年代は、脳の器質的な障害説が台頭したこともあり、遺伝的な要因論についての先駆的な双生児研究が行われた。1977年のスーザン・フォルスティンとラターの研究では、5歳から23歳の双生児を対象に一卵性双生児と二卵性双生児の自閉症の一致率を調べている。その結果、11組の一卵性双生児では4組(36%)の一致があり、10組の二卵性双生児は一致率が0組であった。このことにより、自閉症の病因としては、遺伝的要素も含まれる可能性を示唆した(Rutter, M. and Shopler, E., 1978; 邦訳269-270頁参照)。

また、1979年にローナ・ウィングとジュディス・グールドが、ロンドンで15万5千人の15歳以下の子ども(3万5千人)を対象に疫学的な調査をおこない、自閉症に共通して見られる3つの特徴を見いだした。第1の特徴は、対人的相互交流における質的な障害である。例えば、他者に注意を共有して向けること、他者の模倣、感情を認知するなど、人間として非常に重要となる領域で障害を抱えている。第2の特徴は、言語・非言語コミュニケーションの障害である。例えば、話し言葉の発達の遅れ、あるいはその欠如で代償となるジェスチャーが伴わない。他人の言葉に対して反応が無く、常同的な言語の使用がある。人称代名詞の逆転が起こる、韻律の異常(ピッチ、強勢、イントネーション)などである。第3の特徴は、ふり遊びを含む想像的活動の障害である。例えば、自発的なふり遊びを全くといって良いほどしないこと。また他の子どもを意味なく真似たり、自発的だが常

同的な繰り返しがある。また、ふり遊びが出現しても、それは常同的で単なる繰り返しである。その他に常同性の行動の例では、身体を揺する、歯ざしりなどの身体を使った単純な常同運動から、ものの収集や無意味なパターンに並べたり、一連の行為や日課を繰り返す要求がある。さらに言語的・抽象的なことにまで常同性が見られ、鉄道時刻表や、カレンダー、化学反応などの特定の対象に集中する形で現れるなどがあげられている（Rutter, M. and Shopler, E., 1978; 邦訳56-60頁参照）。ウィングとグールドのこの研究の成果は大きく、現在も自閉症の診断基準⁵⁾としてこの3つの特徴は活用されている。

（3）1980年代以降の自閉症研究

1980年代以降は、自閉症に関する心理学的研究が数多く発表された。例えば、その代表的なものとして、自閉症の対人関係を問題にしているピーター・ホブソンの対人関係の障害説⁶⁾（Hobson, P., 1986a, 1986b, 1993）や脳の機能的障害を提唱しているサリー・オゾノフと共同研究者らによる実行機能障害説⁷⁾があげられる（Ozonoff, S. et al., 1991; Pennington, B. and Ozonoff, S., 1996）。さらに、ある事象の意味を統合する認知的動因に困難性があるというウタ・フリスやフランシス・ハッペらの中枢性統合の障害説⁸⁾である（Frith, U., 1989, 1991; Happe, F., 1994）。このように自閉症の障害に対する多くの心理学的仮説が提起されているが、どの仮説も自閉症のすべての状態像を説明するまでには至っていない。一方、1980年代以降急速に研究が進められてきたのは「心の理論（theory of mind）」についての研究である。「心の理論」の研究は、そもそも霊長類の研究から始められたものであるが、現在は自閉症研

究に応用されている。早期からこの「心の理論」に着目し研究を行ってきたのが、サイモン・パロン＝コウエンである。パロン＝コウエンは自閉症の「心の理論メカニズム：ToMM」の獲得の困難性に関する理論仮説を用いて、自閉症の3つの中核障害を説明しようと試みている。

次に、パロン＝コウエンが指摘する通常児のToMMの獲得過程ならびに、自閉症が抱えるToMMの獲得の困難性について以下に述べていくことにする。

2. 自閉症と「心の理論」の問題について

（1）「心の理論メカニズム：ToMM」の仮説

パロン＝コウエンは、先に述べたウィングらの3つの中核的障害（対人関係の障害、コミュニケーションの障害、ふり遊びを含む想像力の障害）が、ToMMの獲得の難しさから生じているという仮説を立てて検証している（Baron-Cohen, S., 1995）。まず通常の子どもが獲得する「心の理論メカニズム：ToMM」の獲得過程について説明しておきたい（図1.参照）。

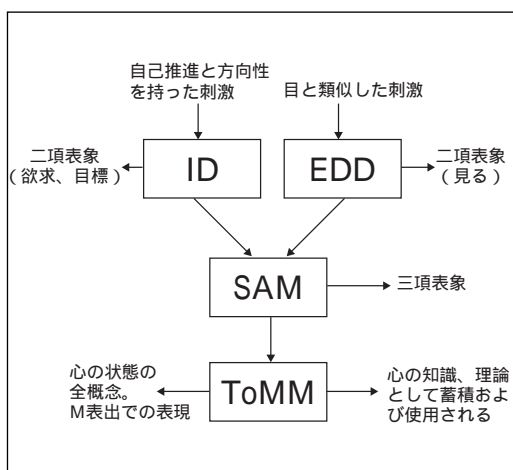


図1. 心を読むシステム

（Baron, Cohen, S.1995; 邦訳67頁）

第1は、意図の検出器 (ID: Intentionality Detector) である。このIDは、生得的に乳児期に備わっている目的や欲求という意図的な心の状態に関する運動刺激を解釈するための知覚装置である。また、視覚と触覚と聴覚によって働く装置である。IDは二項表象の働きを持っており、2つの対象である他者と対象、ないし他者と自分との意図的な関係を作り出す働きを持っている。

第2は、視線の検出器 (EDD: Eye Direction Detector) である。EDDは乳児期に獲得されるものであり、視覚によってのみ働くものである。このEDDは、3つの基本的機能 (目の存在や目に似た刺激の存在を検出すること、目がそれに対して向けられているか、それとも何か他のものに向けられているかを計算すること、そして、他の個体の目が何かに向けられているとすれば、次にその個体はそのものを見ているかどうかを推論すること) を持っている。これもIDと同じ視覚による二項表象として位置づけている。

第3は、注意共有の仕組み (SAM: Shared Attention Mechanism) である。SAMの重要な機能は、三項表象を形成することである。三項表象とは、行為者と自己と対象 (第3のもの) の関係を表しており、ある特定の対象を行為者と自己が共有することをさす。このSAMが三項表象を行うにはEDDやIDの一部が用いられる。

第4は、「心の理論メカニズム (ToMM: Theory of Mind Mechanism)」である。ToMMは行動からすべての心の状態を解釈するためのシステム、すなわち「心の理論」を用いるためのシステムである。このシステムは認知的な心の状態 (ふりをする、思考する、知る、信じる、想像する、夢想する、推測する、あざ

むくなど) を表象⁹⁾する手段である。また、これら全ての心の状態の概念 (意図的、知覚的、認知的) を行為者の心の状態と関係づけて統合的に理解するための手段である (Baron-Cohen, S., 1995; 邦訳 66-104頁参照)。

バロン=コウエンは、この4つのシステムの関係について、通常の子どもの発達段階を示しながら以下のように説明している。第1の段階 (およそ誕生から9か月まで) で、IDとEDDの基本的な機能が確立する。第2段階 (およそ、生後9か月から1歳6か月) では、SAMが登場する。SAMはIDとEDDを結びつけることで基本的な心の状態という観点から視線を読んでいる。最後の第3段階 (およそ生後1歳6か月から4歳) では、SAMに誘発されてToMMが登場してくる。ToMMの登場はふり遊びの開始によって、予告され、大きな質的転換をなす。この質的転換で、自分自身や他者の認識状態の理解が可能になる。この機能はまた「ふりをする」という心の状態から始まる。そして、次の2年間で他者の考えていることを「知る」や「信じる」という重要な心の状態へと発展していく。その後、子どもは他者の心的表象の表象を形成することによって、ToMMを完成させる (Baron-Cohen, S., 1995; 邦訳 105-107頁参照)。

次にバロン=コウエンは自閉症の3つの中核障害を説明する理論として、ToMMの獲得の困難性を仮説的に説明している。第1のIDの理解では、自閉症児は障害を受けておらず、自閉症児にもこの意図的な心の状態が理解できるとしている。第2のEDDの理解も自閉症ではIDと同様、障害を受けていない。第3のSAMについては、多くの自閉症児がSAMの機能に著しい欠損がある。自閉症児はしばしば共同注

意行動におけるすべての主要な形態を欠いている。例えば、原叙述形の行動（他者の注意をある対象や事象にむけるための身ぶりや動作）の獲得が難しいことに、典型的に現れる。自閉症児は原命令形の行動（子どもが欲しいものや事象を動作や身ぶりで表現すること）は障害を受けていないが、原叙述形の行動には困難を示す（Curcio, F., 1978）。また、SAMが機能しないために、聴覚、視覚、触覚においても他者との共有に困難性を示すことがあげられる。例えば、自閉症児は、人に物を操作して欲しいときや自分が欲しいものがあるときなどの要求行動は、他者に物を渡したり、指で指し示したりすることはできるが、これらは注意共有の行動とは呼べない。これらの行動は、他者を主として道具的なものとしてしまっており、他者と対象を共有しようと考えて行っている行動ではない。また、聴覚の困難性では、話し手に応じて言葉のイントネーションを変えることが難しいことなどがあげられる。第4にSAMの欠損によって、ToMMも機能不全に陥っていると仮定される。ToMMの機能不全が生じることで、他者が自分とは違った考えをもっていることや心的な実体と物理的な実体を区別すること、また自分の過去と現在の区別が難しくなることなどが生じてくる。そしてこのことは、結果的にその時々々の知覚や感覚に支配されるやすくなる。総じて、ToMMの機能不全によって、自閉症の3つの中核障害が引き起こされるといふ（Baron-Cohen, S., 1995; 邦訳112-142頁参照）。

（2）「心の理論」に関する研究

バロン＝コウエンは、これらの仮説を実証するために、様々な実験を行っている。このToMMの仮説を構築する背景になった「心の

理論」に関する研究と、バロン＝コウエンが行った自閉症の「心の理論」に関する一連の研究を見ておきたい。

この15年あまり、数多くの「心の理論」に関する研究が報告されている。「心の理論」に関する研究は、霊長類の研究から始められた。ディビッド・プレマックとガイ・ウッドラフが1978年に、チンパンジーの一連の実験¹⁰⁾を行い、その結果からチンパンジーが人間の心の状態を読み取るある種の推論形式を持っていることを明らかにした。プレマックとウッドラフはこの推論形式を「心の理論」と呼び、「人間の行動を予測し、説明するために心で何を考えているのか自己や他者の独立した心の状態を把握する能力」と定義した（Premack, D. and Woodruff, G., 1978, p.518参照）。

このプレマックらの研究は、哲学者や心理学者の間でも大きな反響を呼び、研究が進められた。哲学の分野では、ダニエル・デネットがプレマックらに対するコメント論文を発表した。その中で、「心の理論」の獲得を調べるには、子どもたちが他者の誤った信念の理解をしているかを調べる重要な指標になることを提示した。他者の誤った信念の理解とは、子どもが自分の（真実の）信念とは区別して、他者の（誤った）異なる信念を理解することである（Dennet, D., 1978, p.568-570参照）。この論文が発表されて以後、心理学分野では、デネットの理論的な枠組みが受け継がれることになった。

「心の理論」に関する研究をはじめて幼児に適応したのが、ハインツ・ウィマーとジョゼフ・パーナーである（Wimmer, H. and Perner, J., 1983）。ウィマーとパーナーは、「心の理論」の有無をはかるためにだましの理解（他者の誤った信念の理解）の実験を考案した。実験内容は、

次の通りである。

主人公であるマクシは、緑の戸棚 x にチョコレート置き、遊びに出かける。母親は何も知らずにケーキの材料としてチョコレートを使うため、緑の戸棚 x からチョコを取りだし、青の戸棚 y にしまった。母親は卵をかうため部屋を出て行き、その後マクシは戻ってくる。この人形劇を子どもに見せた後に、対象児に次の質問を施行する。質問 1 は、「マクシはチョコレートがどこにあると思っているでしょうか」であり、質問 2 は「チョコレートを見つけるため、どこを探すと思うか」である。この際、子どもたちの他者の誤った信念の理解を見るためには、対象児が知っている場所（「チョコレートは青の戸棚 y にある」）とは別に、マクシの誤った信念（「チョコレートは緑の戸棚 x にある」）を表象しなければならない。さらにヴィマーらはこの物語のストーリーに主人公と母親以外の第三者（兄・祖父）を含めた内容の物語 2¹¹⁾を提示して、他者の誤った信念の理解が確実であるかどうかを検討した。

実験の結果、物語 1 では、4 歳から 5 歳の子どもは正答するものが半数であり、6 歳から 7 歳、8 歳から 9 歳の子どもはほとんどは正答した。さらに、ヴィマーらは年少児がなぜ誤信念の理解に困難を持つか（4 歳から 5 歳の誤答が半数いること）を検討するために、実験 1 を拡張して 3 歳から 6 歳までを対象に、実験 2¹²⁾を行った。実験結果から、3 歳から 4 歳の対象児は実験の内容を記憶することも困難であり、他者の誤った信念を理解するまでには至らないことが示された。さらに実験 3¹³⁾、実験 4¹⁴⁾を重ねて、対象児がどのようにしてだましの理解を導いているかを詳細に調べた。

ヴィマーらは、これら一連の実験の結果から

最終的に他者の誤った信念の理解は、3 歳から 4 歳では難しく、4 歳から 6 歳のあたりで確立する。また、この時期に 2 人あるいはそれ以上の心の状態の関係を表象する能力が発現し、ほぼ 2 年間をかけて確立するということを示唆した (Wimmer, H. and Perner, J., 1983; 邦訳 22-40 頁参照)。

これらのヴィマーらの研究は、幼児期の発達心理学の研究分野のみならず、自閉症研究にも影響を与えることとなった。

(3) 自閉症と「心の理論」に関する研究

自閉症の研究に「心の理論」に関する研究をはじめて適用したのが、パロン = コウエンらである (Baron-Cohen, S. et al., 1985)。パロン = コウエンは、以下に示す一連の研究で自閉症児の障害と「心の理論」の関係を調べている。

パロン = コウエンはウィマーとパーナーが行った他者の誤った信念の理解の実験課題を改良し、「サリー・アン課題」を考案した。「サリー・アン課題」の実験内容は次の通りである。

被験者は 2 つの人形 (サリーとアン) を提示される。サリーは自分の宝物であるビー玉を自分のかごに入れて、その部屋から離れる。それを見ていたアンは、サリーのいない間にビー玉をかごから箱の中に移し変えて、その場から立ち去る。そこにサリーが帰ってくる。ここで対象児に、「サリーはビー玉を見つけるためにどこをさがしますか」という信念の質問をする。もし、ここで対象児がサリーの誤った信念 (ビー玉はかごにある) を理解して、サリーが最初にビー玉を置いた場所 (かご) を指摘できれば正答となる。また、「実際ビー玉がある場所 (箱)」を指摘すれば、それは誤答となる。さらにこの実験課題の内容が正確に理解できている

かを調べるために、次の対照質問が用意されている。質問1は、「ビー玉は実際どこにありますか」という事実についての質問である。質問2は「ビー玉は最初どこにありましたか」という記憶についての質問である（Baron-Cohen, S. et al, 1985; 邦訳 44-45頁参照）。対象児は自閉症児（平均年齢11歳11か月、言語精神年齢平均5歳5か月）20人、対照群に言語能力水準をあわせた通常の幼児（平均年齢4歳6か月）とダウン症児（平均年齢10歳11か月、言語精神年齢平均2歳11か月）の2群を対象にして、実験を行った。

これらの結果から、通常の幼児3歳から5歳の27人中23人（85%）と自閉症より精神年齢の低いダウン症児の14人中12人（86%）が課題を通過した。一方で自閉症児は20人中4人（20%）しか通過しなかった。パロン＝コウエンらは、対照群より精神年齢の高い自閉症児が他者の心の状態を推測するのが困難であったことから、自閉症児は特異に「心の理論」の獲得に困難があるとした。またその困難性は、言語精神年齢平均の低いダウン症児との比較から知的障害から生じているものではないことを示唆した（Baron-Cohen, S., et al., 1985; 邦訳41-47頁参照）。

その後、パーナーらは「サリー・アン課題」を簡略化した「スマーティ課題」を考案して、さらに研究を進めた（Perner, J. et al, 1989）。「スマーティ」とは、イギリスではたいていの子どもが知っているチョコレート菓子のことである。実験内容は、次の通りである。

子どもにスマーティの箱を見せ、質問1は、「この箱の中に何が入っていますか」と尋ねる。全ての子どもは、「スマーティ」、または「お菓子」と答える。しかし、実験者が箱を開けると

中には鉛筆が入っている。子どもはここで誤った信念を持たされる（自分はスマーティと予測していたが、その信念は誤りで実際は鉛筆であった）。再度、実験者は箱の中に鉛筆を戻す。次に質問2は、「最初に尋ねたとき、あなたは箱の中に何が入っていると仰いましたか」と尋ねる。質問2では、自分の誤った信念の予測（実際は鉛筆が入っていたが、中を見るまではスマーティが入っていると予測していたこと）の理解を確認する。さらに、質問3は、「まだ箱の中を見ていない友達が、この箱を見たら中に何が入っていると思うか」、質問4は、「本当に箱に入っているものは何か」と尋ねる。質問3では、他者の誤った信念の理解（他者は箱の中をまだ見ていないので、スマーティが入っていると推測すること）、質問4では知識の確認（本当は現在鉛筆が入っていること）について正確に理解できているかを調べた（Perner, J. et al., 1989; 邦訳 65-66頁参照）。対象児は自閉症児（平均年齢13歳6か月、言語精神年齢平均6歳2か月）と対照群としての言語障害児（平均年齢8歳8か月、言語精神年齢平均の平均6歳9か月）であった。言語障害児を対照群にした理由としては、他者の誤った信念を推測する難しさが言語障害から生じるかどうかを調べるためである。その結果、言語障害児は12人中11人（92%）が通過したのに対して、自閉症児は12人中2人（17%）しか通過できなかった。したがって、パーナーらは言語障害児が成功した事実から、「言語理解の一般的な障害」が「心の理論」の獲得の失敗を引き起こしているのではなく、自閉症児が特異に「心の理論」の獲得に困難性を持つということを示唆している（Perner et al, 1989; 邦訳61-76頁参照）。

この研究以後も「心の理論」に関する研究が

続けられたが、ここで大きな課題に直面することになった。それは他者の誤った信念の課題を通過する自閉症児の存在が確認され始めたことである。自閉症の認知障害の基礎が「心の理論」の認知障害にあるとするならば、それは明らかに仮説的前提と矛盾することになるからである。

パロン=コウエンはこれらの矛盾を検証するために1989年に「自閉症児の『心の理論』；特異的発達遅滞説」を発表した (Baron-Cohen, S., 1989)。パロン=コウエンは、自閉症児が「心の理論」を獲得する事実は認めたと、それは通常、子どもが獲得する年齢より特異的に遅れて獲得するものだと主張した。パロン=コウエンは対象児に、「サリー・アン課題」を通過した暦年齢の高い自閉症児 (1986年の実験で課題に通過した4人；他の自閉症児に比べると暦年齢が高く、全て9歳9か月以上、平均年齢は15歳3か月) とほぼ同年齢のダウン症児 (平均年齢14歳3か月) と健常の幼児 (平均年齢7歳5か月) を対照群に実験¹⁵⁾を行った。

実験内容は、「二次の信念の推測」に関する内容であった。「二次の信念の推測」とは、「サリー・アン課題」より一段階高い表象機能を必要とする課題である。「サリー・アン課題」は「一次の信念の推測」とよばれて「他者の考えを理解すること、つまり「ある人の信念を他者のものとして推測する」という二重構造を理解する能力をみるものである。一方、「二次の信念の推測」は「ある人の信念を別のある人が考えているものをさらに推測すること、つまり三重構造を理解する能力をさす。この実験の結果、ダウン症児は10人中6人(60%)、健常の幼児は10人中9人(90%)が通過したのに対して、自閉症児は誰も通過できなかった。これらの結果から、自閉症児は「心の理論」が認

知障害として欠けているのではなく、通常より特異的に遅れてこの能力が発達するのではないかと考えた (Baron-Cohen, S., 1989; 邦訳58-60頁参照)。

このように、「心の理論」に関する自閉症児の研究が進められる中で、通常の子どもより「心の理論」の獲得が困難であり、通常より特異的に遅れて「心の理論」の能力が発達するということが示唆された。1980年代以降、パロン=コウエンは、自閉症の「心の理論」に関する一連の研究を行う中で、ToMMの理論的仮説を構築したのである。

パロン=コウエンは、さらに自閉症のToMMの障害仮説に関する研究を進めるために、自閉症のToMMの障害とふり遊びの関係についても関心を広げている。上述のように、パロン=コウエンは、「ToMMの登場はふり遊びの開始によって予告され、相手の心の状態を読む能力が発達する」としている (Baron-Cohen, S., 1995; 邦訳106頁参照)。したがって、自閉症がToMMの発達に障害を持っているのであれば、ふりをするという心の状態を理解することも困難であると予想される。しかし、今までの自閉症児のふりについての研究は、大部分がふりをするという心の状態の理解を直接に検討していないため、これを解明していく研究の必要性を指摘している。さらに、ふりをするのとふりをしないことが、どのように違うかを理解するためにも、子どもが遊んでいるときのふりの内容を観察する必要があると述べている (Baron-Cohen, S., 1995; 邦訳132頁参照)。

はたして、ふりをするのとふりをしないこととの違いはどこにあるのだろうか。また、SAMからToMMの形成とふりとはどういう関係をもっているのだろうか。この疑問を解明し

ていくためにも、通常の子どものふり遊びの発生とふり遊びの発達プロセスについて検討していく必要があるだろう。したがって、早期から象徴的遊び（ふり遊び）に関する研究を進めてきたジャン・ピアジェの理論をもとに、ToMMの発達と象徴機能の発達との関係について、子どもの観察例を通して検討することにする。

3. 「心の理論メカニズム」の発達とふり遊びの関連性

(1) 象徴機能の発生とふり遊びの発達プロセス

ピアジェは通常の子どもの遊びに関する詳細な観察記録を残している（Piaget, J., 1945）。ピアジェは、模倣と遊びを明確に区別して捉える必要性を指摘し、その違いを次のように説明している。「模倣は、調節（自分自身で制御して、外界の働きかけに適應していく働き）であり、遊びはこれとは逆に基本的には同化（自分の器官を働かせて、自然を自分の中に取り入れる働き）である」としている（Piaget, J., 1945, 邦訳12頁参照）。つまり、遊びは自分の持っている表象を色々な物に適應し、自分の中に取り込む活動なのである。象徴機能の発生と深く関わっているのが象徴的遊び（ふり遊び）である。象徴機能¹⁶⁾とは、所記（あらわされるもの）とは異なった能記（あらわすもの）によって、所記を表象する働きである。そして、象徴機能の発生は、感覚運動期の遊び（機能的遊び）と模倣の発達によって、その準備がなされる。そして、この象徴機能の一つの現われを「象徴的遊び（symbolic play）」¹⁷⁾と位置づけている。象徴的遊びの前提になる遊びが機能的遊びであり、象徴的遊びが発展していく中でルールのある遊びへと移行していくのである。

主として、乳児期にみられる機能的遊びは、自己の快樂のために繰り返し行われる行動である。ピアジェはこの機能的遊びを第6段階に分けているが、象徴的遊びの芽生えをその第4段階と考えている。そして、その芽生えをシェマ¹⁸⁾の「儀礼化」として位置づけている。また、その特徴としては儀礼的な行動が通常文脈で行われるのではなく、非日常的な文脈で行われるようになることである（Piaget, J. 1945; 邦訳21-23頁参照）。観察例62は、通常、就寝前に習慣になっている行動が、枕というある指標が動機となり、非日常的な場面でその行動が見られたことを示している。

観察例62

0,9(3) Jは、...彼女が枕をかかえた時、枕のふちが目にとまったので、すぐ吸い始めた。この行動は眠る前にいつもやる行動で、彼女の寝る場合の姿は、いつも枕を横において、そのふちの隅をかかえて、自分の親指を吸うのであった。しかしながらこのことは、半分間はずづけなかった。それからJは自分の早期の行動を再びやりはじめるのであった（Piaget, J. 1945; 邦訳22頁）。

第5段階は、ある新しい要素が第4段階から第6段階への推移を確実なものにする時期である。この段階での特徴は、第4段階で示した儀礼的な行動が、ほとんどすぐに遊びの性質を持ち、様々なバラエティを示すようになる。また、予期していなかった行動もすぐに儀礼化して繰り返し行動される。これらの儀式化が遊戯的な要素をもつことによって、後に象徴的遊びがもたらされるとしている（Piaget, J. 1945; 邦訳23-26頁参照）。観察例63では、手がスリップするという偶発的に起こった行動を直ちに儀礼化し、それが何度も繰り返されるなかで、遊びの要素を持ちパターンを変えていく様子が示さ

れている。

観察例63

1,0 (5) 彼女はお風呂の中で自分の頭髪を右手でもった。ぬれていた手はスリップして水を叩いた。Jは直ちにこれを繰り返す、最初は手を注意深く頭髪の上におき、ついで水の上にもってきた。彼女は高さや位置とを変えた (Piaget, J. 1945; 邦訳 24頁)。

第6段階は、子どもの表象の力は確実になり、儀式化から離れて象徴的な遊びへと変化していく時期である。また、儀礼化された行動(ものを食べるなどの習慣的な行動)は自分の枠組みとして確立しており、その上で「フィクション」的な特質(想像上の性質)を持った行動を行うようになる (Piaget, J. 1945; 邦訳 27-41頁参照)。観察例64(a)では、手を洗うという習慣的な行動が自分の中に取り込まれ、現実でない水を象徴して楽しんでいる様子が示されている。

観察例64(a)

1,6 (28) 彼女は「avon (= savon)」「(せっけん) といった。彼女の両手をつにしてこすって洗うふりをするのであった(水はない) (Piaget, J. 1945; 邦訳 27)。

次に象徴的遊びの発達について、例を示しながら説明する。象徴的遊びは第1段階から第3段階まであり、第1段階は、およそ1歳半から4歳くらいまでをさす。第1段階はレベル からレベル までがあり、さらにレベルがそれぞれタイプAとBに分けられる。

タイプ Aの特徴は、象徴的シエマを新しい事象に投射することである。これらの活動は一見、機能的遊びの第6段階と類似しているが、相違点としては、象徴を独立した表象として捉

えられるようになる(ある対象を別の対象に変え、頭の中でそれを独立した形で思い浮かべることができる)ことにある。そして、自分自身の類似する行動を他者(他の事物)に投射することができるようになる。つまり象徴機能が備わることで、象徴的遊びは機能的遊びとの質を異にするのである (Piaget, J. 1945; 邦訳 72-74頁参照)。観察例75(a)では、スプーンではなく、貝殻を使っていることに象徴機能の基礎的な要素が含まれている。つまり、貝殻をスプーン象徴として扱い、貝殻を見ながら頭の中ではスプーンを思い描いている様子が示されている。また、自分自身で食べるふりをするのではなく、人形や母親を受け手にしていることを重視している。

観察例75(a)

1,8 (25) 彼女はスプーンを空の鉢の中につっこみ、スプーンをとっては人形に食べさせた。同日、貝殻を使って、母と人形の口のところにもっていった (Piaget, J. 1945; 邦訳 73頁)。

タイプ Bの活動は、「新対象物への模倣的シエマの投射である」とされている。これらのシエマは、自分自身の活動ではなく、他者の活動を観察して自分に取り込み、繰り返し行う活動である (Piaget, J. 1945; 邦訳 74頁参照)。観察例76(a)は、モデル(電話する大人)を直接模倣するのではなく、さまざまな事物を電話の象徴として、用いている例が示されている。

観察例76(a)

1,8 (2) , 電話をかけているふりをした。それから人形に電話をさせた(頭の方から声を出して)。それから後、いろいろな種類の事物で(レシーバー代わりに)電話をした (Piaget, J. 1945; 邦訳 75-74頁)。

段階 のレベル Aは、1つの対象と他の対象との簡単な同一化によって特質づけられる。レベル Bは、子ども自身のからだと他者のからだの同一化、あるいは他の事物との同一化¹⁹⁾によって特質づけられる（Piaget, J. 1945; 邦訳 76-83頁参照）。観察例78は Aの例示であり、砂を雨に同一化したり、自分の指の間をドアと同一化していることが示されている。観察例79は Bの例示であり、妹の行動を見てすぐ模倣するのではなく、自分の持つ妹のイメージを媒介にしながら、妹と同一化している。模倣ではなく、象徴化された遊びの例示である。

観察例78

2,1 (27) 彼女は指と指の間を通して砂をこぼした。そしていった。『雨だ』。2,3 (22), 指の間に一片の砂糖を挟んで『おお、私はドアを開けることができない』（Piaget, J. 1945; 邦訳 79頁）。

観察例79

2,6 (3), 彼女は小さい妹になった。そして乳首をしゃぶる行動を模倣した。それは度々起きた遊びであった（Piaget, J. 1945; 邦訳 80-81頁）。

段階 のタイプ は、「象徴的組み合わせ」の時期である。象徴が一度作られると、初歩的な形として2歳台から現れ始め、色々な象徴の組み合わせが3歳から4歳後半の時期に明瞭に現れる。タイプ は4種類の遊びの形態があり、

Aは簡単な組み合わせ、Bは補償的組み合わせ、Cは精算的な組み合わせ、Dは予期的・象徴的組み合わせである。Dの特徴は、自分は他者からの命令や忠告を受容するが、その命令や忠告を守らない想像上の友達をつくりあげ、物語として再現する遊びである（Piaget, J. 1945; 邦訳 83 - 100頁参照）。観察例81は、Aの遊びを示しており、蟻の巣を作るという真実の置き換えの遊びが、徐々に広

汎に発達し、様々な対象に置き換えられること、さらに想像上の人物を扱えることなどが特徴としてあげられる。観察例84は Bの遊びであり、自分がきりぎりすをうまく飼えなかったことから、人形にその不快な気持ちを転移させて、自分の不快な気持ちを中性化しようとする行動が示されている。観察例86は Cの遊びであり、死んだあひるを見たという不快な状態を自分があひるになるという象徴的な状態に置き換えて、その状態から気持ちを分離させて精算している様子が示されている。

観察例81

3,6 (9), 蟻の巣をつくるために一つかみの松葉をあつめた。枕、毛布、ベッドのかけぶとん、シーツ...それから母といとこがあり、地下室には何ほどのマカロニもあった。『蟻が（蟻は現実にいなかった）ここにすわる（彼女は自らすわった）。おばあちゃんがくる。』それから想像上の人物がはいってきた。次の日、遊びは再びもたれた。しかし、それはみな猫の家となった（Piaget, J. 1945; 邦訳 87頁）。

観察例84

4:8 (21), 『きりぎりすを飼いならすこと』ができなかったので、自らを慰め、『マカレージュ（人形）はきりぎりすを飼いならした。どこへでもついてゆくきりぎりすを飼っている。彼女と散歩に出たが帰ってきた』など（Piaget, J. 1945; 邦訳 92-93頁）。

観察例86

3,1 (21), 羽毛をむしられ、台所のテーブルに上におかれた死んでいるあひるを見て、強く印象づけられた。次の日、私はJが私の研究室のソファに音なく座っているのを見た。彼女からだを強く押し、彼女の足を曲げた。『Jちゃん、何してるの？どこか痛いところでもあるの？病気？』、『ううむ、わたし、死んだあひるよ』（Piaget, J. 1945; 邦訳 96頁）。

段階 は、一般的に4歳から7歳にあたる。

この時期、象徴的遊びは象徴的遊びとしての重要性を失い始める。そして、実在への適応がより近くなり、フィクション的な性質を失って、実在のまっすぐな模倣的な表象に近づいていく（象徴的遊びの内容が家族や結婚などの社会的なことに変化していく）。さらに集合的表象性も特徴の一つである。ふたりあるいは数人で遊ぶことを好み、他者にアイデアを借りてきたり、あるいは時々詳細に相互を模倣したりする（Piaget, J. 1945; 邦訳 105-107頁参照）。

段階 は7, 8歳と11, 12歳の間におかれる。この段階では象徴性は減少し、ルールのある遊びに変化し、より適応的作業に近くなるのが特徴である（Piaget, J. 1945; 邦訳 108-109頁参照）。

これらの観察例から、象徴機能の発生は、遊びの質に大きな影響を与えることが示されていた。ピアジェが、象徴機能の発生と関わらせて機能的遊びと象徴的遊びの区別を明確にしていること、また象徴的遊びの発達過程を段階的に示していることなどは重要視すべきであるといえる。

（2）SAMからToMMへの移行とふり遊びの発達

「心の理論メカニズム」におけるSAMからToMMへの移行とピアジェの示した象徴的遊びの関連をみるには、SAMからToMMへの移行がどのように象徴機能の発生や発展に支えられながら進むのかを詳細に見ていく必要がある。

ピアジェは、象徴的遊びの萌芽を儀式的な行動が、いつもとは違う文脈（遊戯的な文脈）で用いられるところに見ている。そして、機能的遊びの最終段階で見られる「自分がふりをする」と象徴的遊びとは区別として捉える必要があり、機能的遊びと象徴的遊びの区別は、

「象徴を独立した形で表象すること」ができるようになることが重要であると指摘している。つまり、象徴機能の発生によって、ある事物を見ながら頭の中では別のものを思い描くことができるようになることである。そして、その遊びを他者（他の事物）にも行わせることによって、象徴的遊びは確実なものになる。SAMの機能は、他者とある事象を共有できるようになることをさすが、この機能が土台となるからこそ、象徴的遊びが共同性を帯びて発生し、発展していくと考えられる。象徴的遊び Aの貝殻を使って、人形や母親の口に運ぶ事例や Bの他者を自分の中に取り込んでそれを同一化する事例を紹介したが、これらの遊びは他者とある事象を共有することが基礎にあるからこそ、遊びは発展していくのであろう。

上記の象徴機能が、象徴遊びの発達の鍵を握っているのであれば、象徴機能の発達についての検討が必要である。ピアジェは、象徴的遊びの段階 を1歳半から4歳後半ごろとしている。これはSAMの確立からToMMへ移行していく時期と重なっている。特にピアジェのあげるタイプ の象徴的遊びが見られる3歳から4歳後半は、事物の置き換えや想像の人物を作り出すような簡単な組み合わせの象徴的遊びから、自分の表象と他者（他の事物）の表象を扱うような複雑なタイプの象徴的遊びに変化していく時期である。すなわち、通常の子どもは3歳から4歳にかけて象徴機能の発達がめざましく進み、自由に表象が扱える（操作できる）ようになることを示しているといえる。したがって、ToMMの獲得には、自由に表象が扱えることが重要な要素として働いていることが必要な条件となるのではないかと考えられる。さらに4歳を境にして集合的表象が獲得されること

にも注目しておくべきであろう。「心の理論」の獲得は通常4歳以降であるとされているが、他者の心的な状態を理解するには、自分の持っている現実の表象と他者が持っている表象を同時に理解しなければならない。これを理解するには、高度な表象能力とその操作力が要求される。したがって、象徴機能を3歳から4歳で発達させることと、4歳以降で相手の表象を理解し、かつ自分の持っている表象と相手の持つ表象の両方を関連づけて操作できるようになることがToMMの獲得には必要な条件になるのではないだろうか。すなわち、ToMMの発達には、このような象徴機能の発達が重要な位置を占めていると考えられる。

（3）自閉症のふり遊びの問題

今までの自閉症のふり遊びに関する研究では、ふり遊びの獲得の難しさについての見解は出されている。しかし、ふり遊びの難しさが何から生じているかという問題を直接論じている研究は少ない（Baron-Cohen, S., 1995; 邦訳132頁参照）。

パロン＝コウエンは、自閉症と象徴的遊び（ふり遊び）²⁰⁾との関連を調べるために、通常の子供とダウン症児を対照群に、3群の比較検討を行った（Baron-Cohen, S., 1987）。そして、ふり遊びの観察のために、4つの遊び（感覚運動的遊び、秩序だった遊び、機能的遊び、ふり遊び）の課題を設定している。感覚運動遊びとは、ものを叩いたり、揺らしたり、吸ったり、投げたりなどで機能に目もくれないといったことである。秩序だった遊びとは、機能的遊びにはなり得ていない、ある物を無理やり型に押しこんだり、几帳面に並べたり、整理することなどである。機能的遊びとは、物を慣習通りに使

うことである。例えば、何かある対象を命名する、鍋に何かを入れる、人形をブランコに座らせて揺らすなどである。ふり遊びとは、「まるで～のように」あるものをほかのものに例えることや、何も持たずに特性に応じて物を象徴すること、存在しないものをまるで存在するように例えることなどである。その結果、この4つの遊びの中で自閉症児のみ、ふり遊びの獲得が難しいことが示された。その他の遊びは対照群と比較しても差は見られなかった。これらのことより、自閉症は機能的遊びまでの困難性はみられず、ふり遊びに困難をもつことが明らかにされた。パロン＝コウエンはさらに自閉症がふり遊びを示さないことの意味を解明すべく、機能的遊びとふり遊びの質の違いを検討している。これらを分かつ概念として、アラン・レスリーの説明概念である一次的表象と二次的表象という概念を使って言及している。すなわち、レスリーは一次的表象を「世界そのものを直接表象すること」として、例えば「ある物をバナナと表すこと」などとする。また、二次的表象は「一次的表象の現実（これはバナナだ）を切り離し、さらに別のもの（電話）に表すこと」として、この二次的表象が確立されることで現実とふりの区別が可能になると指摘している（Leslie, A., 1987; 邦訳139-207頁）。パロン＝コウエンは、自閉症児がふり遊びのみに困難を示すことから、自閉症にはこの二次的表象を生み出すことに困難を抱えているのではないかと考えるのである（Baron-Cohen, S., 1987, p.139-147参照）。

さらに、ジュリー・ハウリンやパロン＝コウエンらは、遊びのレベルを5段階に分けて、自閉症児の遊びに関する教育的効果の研究を行っている（Hawlin, J. et al., 1996）。この研究で

は、主に遊びの量と質を念頭に置いて、ふり遊びのレベルが区分されている。レベル1は、感覚運動遊びの段階であり、おもちゃを叩いたり、吸ったり、並べる行為などである。レベル2と3は、機能的遊びの段階であり、社会的に慣習になっている方法でおもちゃを使う場合である。子どもが機能的遊びを2つ以下しか例を示さなければレベル2、例を3つ以上示したらレベル3と評価された。レベル4と5は、何らかの自発的なふり遊びをする段階である。ふり遊びの定義や基準は、レスリーから引用して評価基準に加えている (Leslie, A., 1987; 邦訳 206頁参照)。ふり遊びは「何かある物が実際にはそうでないのにそうであるかのように子どもがふるまうこと」であり、ふり遊びの3つの基準は物の代用²¹⁾、属性のふり²²⁾、想像した物²³⁾である。これら3つの基準の例を2つ以下しか示さない場合はレベル4、3つ以上示した場合はレベル5と評価された。対象児は自閉症児10人であり、上記の評価基準で評価され、ふり遊びを引き出すような教育が行われた。その結果、10人中5人は自発的な遊びを示さなかった。自発的な遊びを示した5人も遊びの行為は本質的に生き生きしておらず、喜びを感じている様子はなかった。また、このうち3人はふり遊びを示したがふり遊びの例は柔軟性に欠け、反復的な遊びが多かったと述べている (Baron-Cohen, S. et al., 1996; 邦訳 373-378頁参照)。

上記からも明らかのように、自閉症児の場合、機能的遊びは出現するがふり遊び自体が出現しにくく、さらに教育的な方法をとってもふり遊びは発展しにくいことが示されている。

これらの結果と「心の理論メカニズム」と象徴機能の発達との関連で見えていくならば、二つの問題が指摘できる。

第1に、自閉症児がSAMの形成に困難があるのであれば、象徴機能の発生に問題が生じるということが考えられる。象徴機能の発生の準備は、感覚運動期の模倣と遊びにある。つまり、感覚運動期の第4期ごろに獲得されるSAMに困難があるため、ある対象を人との共有することが難しく、模倣と遊びは発展しにくいことが指摘できる。模倣が遅れると必然的に象徴機能の発生も遅れると考えられる。このことは、自閉症児のふり遊び (機能的ふり遊びや象徴的ふり遊び) の困難性を招くことを同時に意味しているのである。その結果、自閉症児は、感覚運動期に主にみられる機能的遊びが中心で、事物に依存的な遊びの展開がなされる。そのことが遊び自体の乏しさや常同性を強めていると考えられる。

第2に象徴機能の乏しさが、SAMの確立からToMMへの移行の問題も引き起こしている可能性があるということである。通常の子どもは2歳から3歳にかけて、モデルを取り込んで同一化する中で3歳から4歳にかけて象徴機能の発達が進み、表象を自由に操作できるようになる。しかし、自閉症児の場合、SAMを土台とした象徴機能の獲得に困難があるため、他者との同一化も難しくなるのである。その結果、表象の自由度は高まらないのである。それらは必然的にToMMの獲得を困難する要因となっている。ピアジェの指摘した象徴的遊びの質を自閉症児にどの時期にどのレベルで用意していくかが、療育プログラム開発の鍵を握るといえる。

SAMを土台とした象徴機能の獲得過程の研究および、ふり遊び (機能的ふり遊びおよび象徴的ふり遊び) に関する研究は、パロン = コウエンが指摘する自閉症児のToMMの獲得の困難性を解明していく上で、非常に重要な手がか

りになるといえる。今後、ふり遊びを起動させる象徴機能の発生、ならびにふり遊びの発達プロセスをどのように自閉症児の療育へ利用していくか、早期診断や教育的アプローチへの応用も視野に入れて研究を進めていく必要がある。

4. 療育の可能性について

(1) 自閉症の早期発見への試み

自閉症児のふり遊びの問題を含め、認知発達に関する研究の成果を実践に生かしていこうとする試みがパロン＝コウエンらによって始められている。パロン＝コウエンらは、自閉症の早期発見の可能性に着目している。1992年に18か月の時点で自閉症を早期発見し、診断しようという試みがイギリスにおいて大規模に実施された（Baron-Cohen, S. et al., 1992）。早期診断リストで選び出された子どもは、健常の子ども18か月児50人（平均年齢18.3か月）と自閉症の疑いのあるハイリスク児41人（平均年齢19.3か月）であった。すべての対象児に「CHAT」と呼ばれる診断項目が実施された。「CHAT」の内容は、5領域（社会的行動²⁴⁾・社会的関心²⁵⁾・ふり行動・共同注視²⁶⁾・叙述の指さし²⁷⁾）と項目毎に4領域（機能的遊び・要求の指さし・運動神経系の発達・粗雑で転げるような行動）を入れた9項目からなる。この診断は開業医や保健婦によって実施された。その結果、グループ2（ハイリスク児）では、41人中4人（グループ内の9.8%）が、叙述の指さし、共同注視、ふり行動の3項目で共通して不合格であった。さらに1年後の追跡調査の結果から、グループ2（ハイリスク児）のうち、18か月の時点で「CHAT」に通過しなかった4名は、24か月から30か月で自閉症と診断されて

いた（DSM-Ⅱ-Rで診断）。この結果から「CHAT」は自閉症児を18か月で検出できる指標となる可能性を示したのである（Baron-Cohen, S. et al, 1992, p.839-843参照）。パロン＝コウエンらは、さらに「CHAT」の信頼性を高めるために、1996年に再度18か月児16,000人を対象に調査している。この調査により、18か月時に一貫して「CHAT」が不合格になると、自閉症のリスクが83.3%となることが示された（Baron-Cohen, S. et al., 1996; 邦訳413頁参照）。これらの結果からも明らかのように、「CHAT」の有効性が改めて実証された。

パロン＝コウエンらの研究は、まさにSAMや象徴機能の発生を関連づけた実験的研究といえる。これらはSAMの欠損による象徴機能の獲得の困難性が、自閉症児に特有であることも同時に示されている。今後は、このような大規模な調査の中で明らかになってくる徴候をさらに検討していく必要があると思われる。

(2) 自閉症のふり遊びの指導と療育の方法論的検討

ハウリンやパロン＝コウエンらは、自閉症児の抱える感情の理解、「心の理論（他者の誤った信念）」の理解、ふり遊びの困難性に着目し、これらに関する教育的な試み²⁸⁾を行っている（Hawlin, J. et al., 1996）。その結果、感情と信念の教育については一定の効果が認められた。そして、この能力は異なる新しい課題を実施しても保たれていた。しかし、学習効果を他の領域で確かめたところ、般化できるという証拠は見いだせなかった。その理由としては、感情や信念についての課題を通過する能力は学べても、その背後にある概念を理解することは学べなかったことなどが考えられる。この2つの領

域の課題は、課題が構造化されており、規則性さえ学べばその規則を応用して課題を通過することは可能だからである。また、ふり遊びに関しては教育前と教育後の比較では有意差がみられるほどの効果は現れなかった（Hawlin, S., 1996; 邦訳 367-384頁参照）。

パロン＝コウエンらが行っているように「心の理論」に関する課題やふり遊びを操作的に教えることが果たして中核障害の改善につながるかは疑問であり、今後の課題となっているといえる。

今回、明らかにしてきた自閉症児の象徴機能の発生レベルでの困難性とふり遊びの発達プロセスでの困難性を遡及していくために、療育の内容や方法が検討されべきであると考え。例えば、象徴的遊びが出現していない子どもの場合であれば、象徴機能の発生を推し進める感覚運動期の機能的遊びや模倣に着目した試みがなされていく必要がある。自閉症児の機能的遊びが、どの段階の特質を持っているかを正確に評価し、療育の中で他者（療育者）を媒介しながら、象徴的遊びの萌芽を目指すことが重要である。また、自閉症児がふり行動を見せても、第6期に見られる自分でふりをするという機能的遊び（機能的ふり遊び）と真の象徴的遊び（象徴的ふり遊び）の区別しておく必要がある。つまり、ふり遊びを広く捉えたアプローチではなく、ふり遊びの中に象徴機能が媒介しているかどうかを重視したアプローチが重要なのである。このように象徴機能の発生に着目した細かいステップをふんだ療育プログラムの検討がなされていく必要がある。

また、象徴的遊びを獲得しても、反復的で柔軟性に欠ける子どもの場合は、象徴機能の発達過程に応じた療育の検討が必要であると考えら

れる。おそらく、象徴的遊びが乏しくなる原因として、象徴機能は獲得されても、その機能を発展させることが難しく、通常3歳から4歳後半で獲得される表象の操作力に問題を生じている可能性があるからである。これらの子どもには、象徴的遊びの初期のレベルから表象が自由に扱える高次のレベルまでの発達過程を考慮に入れた、療育プログラムの検討されていく必要がある。これらのプログラムの開発によって、自閉症が特異に遅れて獲得すると言われている「心の理論」の本質的な理解を進めていくことができるのではないだろうか。

日本でも、伊藤が自閉症の療育に遊びの要素をどのレベルで促していくかを検討している（伊藤, 1992, 2001）。伊藤は、健常の子どもの遊びの発達段階と自閉症の特質を概観していく中で、自閉症の遊びの特徴を「遊び心」の欠落と指摘している。そして、情動交流遊び（ゆさぶり、くすぐり遊びなど）を通して生まれる期待や喜びを感じさせていくような療育的試みが自閉症児には必要であることを述べている（伊藤, 2001, 49頁参照）。

このように、自閉症児の遊びに関する療育に関する知見は様々であるが、やはり、ふり遊びに着目した療育的な試みは、自閉症児の発達にとっては非常に重要であり、これらの試みは中核障害を改善させる糸口になるのではないだろうか。今後、実践的研究を積み重ねる中で、これらを実証的に明らかにしていく必要があるであろう。

注

- 1) 統合性失調症というのは、精神分裂病の新呼称である。平成14年6月末より日本精神神経学会採択のもとに使用されている。

- 2) 元の発話からいくらか時間を置いて逐語的に反復されたもの（岡本夏木他, 1995, 571頁参照）。
- 3) 自分自身を言及するときに「あなた」という代名詞を使い、他者を言及するときに「わたし」という代名詞を使用するなど、通常の代名詞の使い方が他者と逆転すること（Happe, F., 1994; 邦訳 16頁参照）。
- 4) 実際上は意味のない物、例えばカレンダーなどを桁外れに記憶することなどである（Happe, F., 1994; 邦訳 15-16頁参照）。
- 5) 現在、自閉症の診断は、アメリカ精神医学学会作成の「精神疾患の診断と統計のためのマニュアル第四版:DSM-Ⅳ」と、世界保健機構作成（WHO）作成の「国際疾患分類第10版: ICD10」などが用いられている。その中で、ウィングらの3つの行動特徴が診断基準の項目に用いられている。
- 6) 対人関係の障害説とは、自閉症児は表情や情緒表現に関する対人の「関係性」の理解が生まれつき障害を受けており、それによって乳幼児期から育まれるべき養育者との相互交流を持つことができない。その結果として二次的に対人関係での問題が引き起こっているという説である（Hobson, P., 1993; 邦訳 87-139頁参照）。
- 7) 実行機能とは、大脳前頭葉が関与する高次の認知機能のことである。実行機能障害説はそもそも、何らかの事故で前頭葉に障害を受けた患者が自閉症児の特徴とよく似た特徴を示したことから研究が進められている（Pennington, B. and Ozonoff, S., 1996; 邦訳 305-310頁参照）。
- 8) 中枢性統合とは、あいまいな情報を脈力に照らして処理し、文全体を統合して意味を理解する能力である。自閉症の人の場合、中枢性統合の能力が乏しいため、個々の単語を理解する能力については優れているが、情報を統合して意味を理解する能力で困難を示す（Happe, F., 1994; 邦訳 199-210頁参照）。
- 9) 表象とは、対象、事象、行為などの現前にしないものを思い浮かべることができること（岡本夏木他, 1995, 587頁参照）。
- 10) 実験の内容は次の通りである。ブレマックらは一頭のチンパンジーを用いて、ある状況に置かれた人間の行動を見て、その人間の考えを推測できるかどうかを調べた。例えば、檻に入っているため扉を開けようとするが、扉が開けられずに困っている人や、天井にバナナがあるのに手が届かずに困っている人などのビデオを見せる。その後、ビデオを用いて人が困っている状態の静止画像を見せながら、その課題を解決するための道具、例えば鍵や踏み台などの写真を目の前に置いて見せ、どの写真を選ぶかを調べた。すると、彼らが予想したとおり、チンパンジーはある状況下での人間の行動を見て、その状況で人間が考えるであろう思考内容と密接に関連する道具の写真を実験者に示したのである（Premack, D. and Woodruff, G., 1978, p.515-526参照）。
- 11) 物語2は、競争バージョンと協調バージョンに内容が分けて設定してある。競争バージョンでは、マクシがチョコレートを手に入れる前に兄が登場して、チョコレートを探し始める。マクシ（チョコレートがxにあると間違っただけ信じている）は、「お兄さんはチョコレートを全部食べたがっている。兄さんが絶対にチョコレートを見つからないように。何か全然違ったことを教えてやるぞ」と考える。他方、協調バージョンでは、マクシはチョコレートを食べようと箱を探しますが、小さすぎてそこに手が届かない。そこへおじいさんがやってきて、マクシが「おじいさん、棚からチョコレートを取るのを手伝ってください」という。おじいさんが「どの棚だね?」と尋ねる。そこで、競争バージョンと協調バージョンのそれぞれの物語のあとに、「マクシはお兄さんにチョコレートがどこにあると教えるでしょうか」と質問される。競争バージョンでは、マクシの意図を正しく読んで「チョコレートは青の戸棚yにある」と兄に告げることでマクシが兄を欺こうとするだろうということが理解できていれば正答となる。他方、協調バージョンでは、マクシが誤った信念（「チョコレートは緑の戸棚にある」）を持っていることを読みとって、おじいさんに「チョコレートは緑の戸棚xにある」（マクシとしては正しい知識）と答えることができれば正答となる。両課題と

- も、誤信念を正確に理解できているかを確かめる課題となっている (Wimmer, H. and Perner, J., 1983; 邦訳 26-27頁参照)
- 12) 実験2は、実験1の課題を修正して行われた。その内容とは、物語1でマクシが戻ってくるシーンで、標準の置き換え (Standard Displacement) の条件を設定し、「マクシがチョコレートを探しに行くのはどこでしょう」という信念に関する質問をする。その後、対象児が正しい反応をした場合には、これに次いで「本当はチョコレートがどこにありますか」という事実についての質問をする。他方、誤答した場合には「最初にマクシがどこにチョコレートをおいたか覚えていますか」という記憶の質問が与えられた。また、年少児は即時的に答えを導く傾向があるために、信念の質問をする前に「待つて考える置き換え (Stop and Think Displacement) (ちょっと待つて考えるように)」という条件と状態に類似性をなくすために、消失 (Disappear) の条件 (母親がチョコレートを違う棚に隠しておくのではなく、チョコレートをすべて使ってしまう) を加えて実験を行った (Wimmer, H. and Perner, J., 1983; 邦訳 29-32頁参照)。
- 13) 実験3では、4歳から5歳の子どもが誤答する要因は物語の内容の複雑さが影響しているのではないかと考えて、誤信念の表象から生じる複雑さがない場合での幼児の「嘘の発言」を構成する能力を検討した。その結果、何ら複雑な仮定が含まれていなくても、4歳から6歳にかけては嘘の発言を構成することは難しいと言うことが示された (Wimmer, H. and Perner, J., 1983; 邦訳 32-34頁参照)。
- 14) 実験4では、「だましの文脈」と「情報の文脈」を設定して、4歳から6歳の推論の能力を検討している。結果では、4歳6か月では50%であり、だましの策略を理解することは難しかった。一方、5歳6か月の子どもは推論を正しくできることが示された (Wimmer, H. and Perner, J., 1983; 邦訳 34-38頁参照)。
- 15) バロン=コウエンは、「二次の信念の推測」の能力をみるための実験を考案した。内容は次の通りである。登場人物は「ジョンとメアリー」の2人である。2人が公園にいるところにアイスクリーム屋さんがやってくる。ジョンはアイスクリームを買いたいが、お金を家に忘れてきた。ジョンはとてもがっかりしている。その様子を見てアイスクリーム屋さんは「大丈夫、家に帰ってお金を取ってきてからでも良いよ。昼からもずっとここにいるから。」という。ジョンは「よかった。昼からアイスクリームを買いに戻ってこよう」という。そして、ジョンは家に戻った。ところがアイスクリーム屋さんが「教会まで行ってみよう。教会のそばでアイスクリームが売れるかもしれない。」と言って教会へ向かう。途中でジョンの家の前を通りかかるとジョンがいた。そこでジョンが「どこへいくの?」と尋ねると、アイスクリーム屋さんは「教会のそばでアイスクリームを売るんだ」と言って、教会まで運転していく。さて、メアリーは家に戻り、ジョンの家に行った。するとジョンのお母さんが出てきて「ジョンはいないの。アイスクリームを買いに行ったの。」と答える。この内容の人形劇を行った後、子どもに次のような質問をする。信念の質問は「メアリーはジョンがどこにアイスクリームを買いに行ったと思っていますか?」、理由の質問は「それはなぜですか?」、事実の質問は「ジョンはアイスクリームを買いに本当はどこに行きましたか?」、記憶の質問は「アイスクリーム屋さんは最初どこにいましたか?」である。この4つの質問から「メアリーはジョンがアイスクリーム屋さんに出会ったことは知らないの、ジョンが公園に行ったと考えているということが理解できるか」という内容の課題を考案した (Baron-Cohen, S., 1989; 邦訳 54-56頁参照)。
- 16) 象徴機能に関する説明をさらにすると、記号的意味作用において、あるものをそれとは異なるもので代表させる働きをする。象徴機能は言語機能の中核をなし、象徴機能が獲得されると言語の獲得が急速に進むとされている (岡本夏木 他, 1995, 326頁参照)。
- 17) 象徴的遊びの具体的な形がふり遊びである。象徴的遊びは、言葉と共に幼児期の象徴機能と表象の作用の発達を代表するもので、重要な精

- 神発達を示す (岡本夏木 他, 1995, 326頁参照)。
- 18) シェマ (schema) とは, ピアジェの考える認知システムの1つの均衡として捉えている。認知システムを構成する諸要素のことをさす (岡本夏木 他, 1995, 237-238頁参照)。
- 19) 同一化とは, 他者の持つ属性を自己のうちに取り入れ, それと似た存在になることである。無意識的に生じるので, 意識的になされる模倣とは区別される (岡本夏木他, 1995, 488頁参照)。
- 20) バロン=コウエンは, 論文中で象徴的遊びとふり遊びを同一線上の物として位置づけている (Baron-Cohen, S., 1987, p.139参照)。
- 21) 「子どもは貝殻が猫であるとみなす」ことなどをさす (Leslie, A., 1987; 邦訳 206頁参照)。
- 22) 「子どもが人形の (きれいな) 顔が汚れている」とすることなどをさす (Leslie, A., 1987; 邦訳 206頁参照)。
- 23) 「子どもはスプーンがそこにあるかのようなふりをする」ことをさす (Leslie, A., 1987; 邦訳 206頁)。
- 24) 社会的行動とは, 親に何かものを持ってきて見せるような行動をさす (Bron-Cohen, S., 1992, p842参照)。
- 25) 社会的関心とは, 他児への関心があるかどうかなどである (Bron-Cohen, S., 1992, p842参照)。
- 26) 共同注視 (gaze-monitoring) とは, 生後9か月から14か月の健常児が, 大人と同じ方向をみる行動を指す (Bron-Cohen, S., 1993; 邦訳 406頁参照)。
- 27) 原叙述の指さし (protodeclarative pointing) とは, 生後9か月から14か月の健常児が, 対象物を他者に示すために指をさして教えること (Bron-Cohen, S., 1993; 邦訳 406頁参照)。
- 28) バロン=コウエンらは, 3つの視点 (感情の理解, 『心の理論』の理解, ふり遊び) に視点を置いて, 評価基準を用いて, 対象児にレベル毎にグループ分けした。評価基準は以下の通りである。感情の理解の評価では, レベル1が写真による表情の認知, レベル2が図形化させた表情の認知, レベル3が状況を基にした感情, レベル4が欲求を基にした感情, レベル5が信念を基にした感情である。信念の理解では, レベ

ル1が単純な視点取り, レベル2が複雑な視点取り, レベル3が見ることは知ることを導く, レベル4が真の信念と行動の予測, レベル5が誤信念の課題である。ふり遊びの評価では, レベル1が感覚運動遊び, レベル2が機能的遊び (例は2つ以下), レベル3が機能的遊び (例は2つ以上), レベル4がふり遊び (例は2つ以下), レベル5がふり遊び (例は2つ以上) である。子どもたちは, 評価されたレベルから教育がスタートされた (Hawlin, J. et al., 1996; 邦訳 372-373頁参照)。

引用文献

- Asperger, H. Autistischen Psychopathen im Kindesalter. *Aichiv Fur Psychiatrie und Nervenkrankheiten*. 117, 1944, p.217-250. (U. フリス編: 富田真紀訳, 『自閉症とアスペルガー』, 東京書籍, 1996に所収)
- Baron-Cohen, S. Autism and Simbolic play. *British Journal of Developmental Psychology*, 5, 1987, p.139-148.
- Baron-Cohen, S. The autistic child's theory of mind: A case of specific developmental delay. *Journal of Child Psychology and psychiatry*, 30, 1989, p.285-298. (高木隆郎・M.ラター・E. ショブラー編, 『自閉症と発達障害研究の進歩 - 1997/Vol.1』, 日本文化科学社, 1996に所収)
- Baron-Cohen, S. MINDBLINDNESS, THE MIT Press, 1995. (長野敬他訳, 『自閉症とマインド・ブライントネス』, 青土社, 1997)
- Baron-Cohen, S., Leslie, A. and Frith, U. Does the autistic child have a theory of mind? *Cognition*, 21, 1985, p.37-46. (高木隆郎・M.ラター・E. ショブラー編, 『自閉症と発達障害研究の進歩 - 1997/Vol.1』, 日本文化科学社, 1996に所収)
- Baron-Cohen, S., Allen, J. and Gillbarg, C. Can Autism be Deteced at 18 Months? The needle, the Haystack, and the CHAT. *British Journal of Psychiatry*, 161, 1992, p.839-843
- Baron-Cohen, S., Cox, A., Baird, G., Swettenham, J., Nightingale, N., Morgan, K., Dwew, A., and Cherman, T. Psychological markers in the direc-

- tion of autism in infancy in a large population. *British Journal of psychiatry*, 168, 1993, p.158-163. (高木隆郎・M.ラター・E.シヨブラー編, 『自閉症と発達障害研究の進歩 - 1998 / Vol.2』, 日本文化科学社, 1997に所収)
- Curcio, F. Sensorimotor functioning and communication in mute autistic children. *Journal of autism and childhood schizophrenia*, 8, 1978, p.281-292.
- Dennett, D. Beliefs about Beliefs. *The Behavioral and Brain Sciences*, 4, 1978, p.568-570.
- Frith, U. AUTISM: Explain the Enigma. Basil Blackwell, 1989. (富田真紀・清水康夫訳, 『自閉症の謎を解き明かす』, 東京書籍, 1991)
- Frith, U. Autism and Asperger Syndrome. Cambridge University Press, 1991. (富田真紀訳, 『自閉症とアスペルガー症候群』, 東京書籍, 1996)
- Hadwin, J., Baron-Cohen, S., Howlin, P., and Hill, K. Can we teach children with autism to understand emotions, belief, or pretence? *Development and Psychopathology*, 8, 1996, p.345-365. (高木隆郎・M.ラター・E.シヨブラー編, 『自閉症と発達障害研究の進歩 - 1998/Vol.2』, 日本文化科学社, 1997に所収)
- Happe, F. Autism an introduction to psychological theory, UCL Press, 1994. (石坂好樹他訳, 『自閉症の心の世界』, 星和書店, 1997)
- Hobson, P. The autistic child's appraisal of expressions of emotion. *Journal of Child Psychology and psychiatry*, 27, 1986a, p.321-342.
- Hobson, P. The autistic child's appraisal of expressions of emotion: a further study. *Journal of Child Psychology and psychiatry*, 27, 1986b, p.671-680.
- Hobson, P. Autism and the Development of Mind Lawrence Erlbaum Associates Ltd. UK. 1993. (木下孝司監訳, 『自閉症と心の発達 「心の理論」を超えて』, 学苑社, 2000)
- 伊藤良子, 「自閉症児と健常乳児におけるコミュニケーションの発達と情動の共有」, 『特殊教育研究施設報告』, 41, 1992, 87-98頁.
- 伊藤良子, 「自閉症児の遊びの特徴と指導方法に関する研究動向とその課題」, 『特殊教育研究』, 39, Vol.3, 2001, 43-51頁.
- Kanner, L. Autistic disturbances of affective contact. *Nervous Child*, 2, 1943, p.217-250. (十亀史郎・斉藤聡明・岩本憲訳, 『幼児自閉症の研究』, 黎明書房, 1995に所収)
- Kanner, L. Irrelevant and metaphorical language in early infantile autism. *American journal of psychiatry*, 3, 1946. p.242-246. (十亀史郎・斉藤聡明・岩本憲訳, 『幼児自閉症の研究』, 黎明書房, 1995に所収)
- Kanner, L. Early infantile autism and schizophrenia. *The Behavioral Science*, 10, 1965, p.412-420. (十亀史郎・斉藤聡明・岩本憲訳, 『幼児自閉症の研究』, 黎明書房, 1995に所収)
- Leslie, A. Pretend and Representation: The Origins of "Theory of Mind". *Psychological Preview*, 94, no4, 1987, p.412-426. (阪田真代訳, 「ふりと想像: 『心の理論』の起源」, *Imago*, 7, 1996, 198-225頁)
- 岡本夏木・清水御代明・村井潤一監修, 『発達心理学事典』, ミネルヴァ書房, 1995, 2002.
- Ozonoff, S. Pennington, B. and Rogers, S. Executive function deficits in high-functioning autistic individuals: Relationship to theory of mind. *Journal of Child Psychology and Psychiatry*, 32, 1991, p.1081-1105. (高木隆郎・M.ラター・E.シヨブラー編, 『自閉症と発達障害研究の進歩 - 1997/Vol.1』, 日本文化科学社, 1996に所収)
- Pennington, B. and Ozonoff, S. Executive functions and developmental psychopathology. *Journal of Child Psychology and Psychiatry*, 37, 1996, p.51-87. (高木隆郎・M.ラター・E.シヨブラー編, 『自閉症と発達障害研究の進歩 - 1998/Vol.2』, 日本文化科学社, 1997に所収)
- Perner, J., Frith, U., Leslie, A. and Leekam, S. Exploration of the autistic child's theory of mind: knowledge, belief and communication. *Child Development*, 60, 1989, p.689-700. (高木隆郎・M.ラター・E.シヨブラー編, 『自閉症と発達障害研究の進歩 - 1997/Vol.1』, 日本文化科学社, 1996に所収)
- Piaget, J. La Formation do Symble chez L'enfant, Delachaux & Niestle, 1945. (大伴茂訳, 『遊びの心理学』, 黎明書房, 1988)

- Premack, D. and Woodruff, G. Does chimpanzee have a theory of mind? *The Behavioral and Brain Science*, 1, 1978, p.515-526.
- Rutter, M. Concepts of autism: A review of research. *Journal of Child Psychology and Psychiatry*, 19, 1968, p.1-25.
- Rutter, M. and Schopler, E. eds., *Autism: A Reappraisal of Concepts and Treatment*, Plenum Press, 1978.
(丸井文男監訳, 『自閉症』, 黎明書房, 1982)
- Wimmer, H. and Perner, J. Beliefs about beliefs: Representation and constrain-ing function of wrong beliefs in young children's understanding deception. *Cognition*, 13, 1983, p.103-138.
(高木隆郎・M.ラター・E.ショブラー編, 『自閉症と発達障害研究の進歩 - 1997/Vol.1』, 日本文化科学社, 1996に所収)

The cognitive development and pretend play of autistic children: Relevance of the Theory of Mind Mechanism, and a symbol function

TATSUTA Sayoko *

Abstract: The purpose of this article is to verify the obstacle hypothesis of autism, the “Theory of Mind Mechanism: ToMM”, by the development of pretend play. In research on cognitive development of autism, the research on the “Theory of Mind” has become too popular since the 1980s. Through the research, it is pointed that autistic children have difficulty in forming the structure of “Shared Attention Mechanism: SAM”, and that the malfunction of ToMM was further aggravated by the difficulty of SAM. Recently, the role of pretend play in that development has been observed, in the process of ToMM. In order to clarify the obstacle of ToMM in the background, it is necessary to focus on the generation and development of the symbolic function, which produces the pretend play, by Piaget’s observation. Therefore, in this paper, three points have been selected for considerations:

1. Autistic children might have the characteristic that generating of the symbolic function is overdue, by an obstacle of SAM.
2. Formation of ToMM might become difficult for autistic children, since the development of the symbolic function is overdue.
3. It is important to introduce the early intervention program according to the developmental stage of pretend play, which is produced from the symbollic function, in an improvement of the core obstacle of autism.

Keywords: autistic children, theory of mind, symbolic function, Shared Attention Mechanism (SAM), Theory of Mind Mechanism (ToMM), pretend play, a early intervention program

* Graduate Student, Graduate School of Sociology, Ritsumeikan University